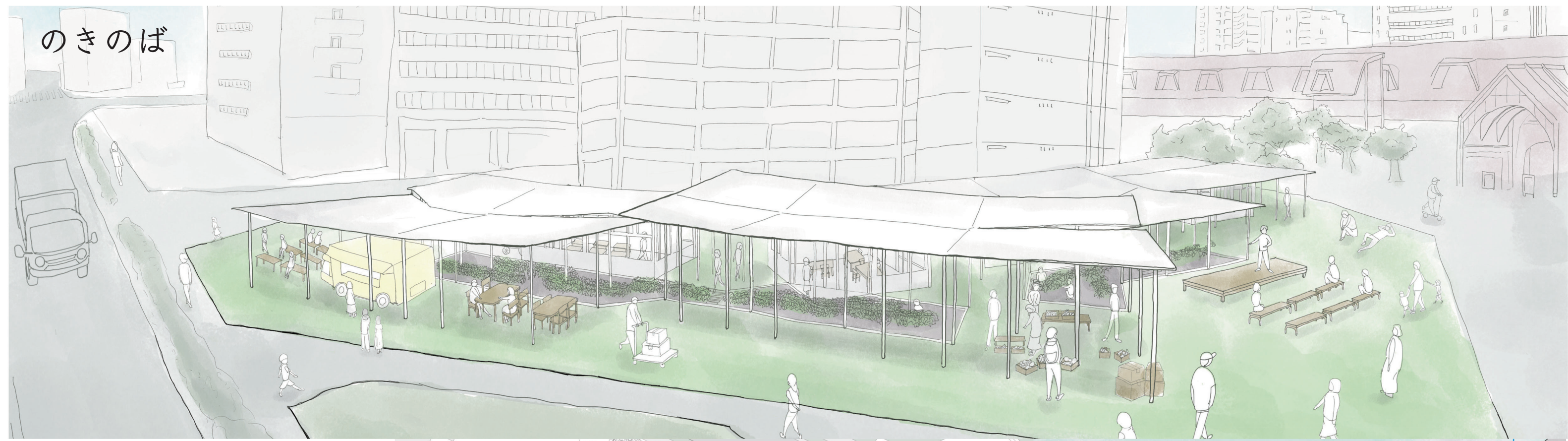


のきのば



01 個別化された三河安城



三河安城駅周辺には高層住宅や工場が点在しており、それを商業や農地帯が囲みとても利便性が高く住みやすい町であるが、三河安城駅周辺の多くの公園や広場では人が活動している姿は見えない。この町では住みやすさと裏腹に個別化された生活の中で他者や外部との関係性を失いかけています。

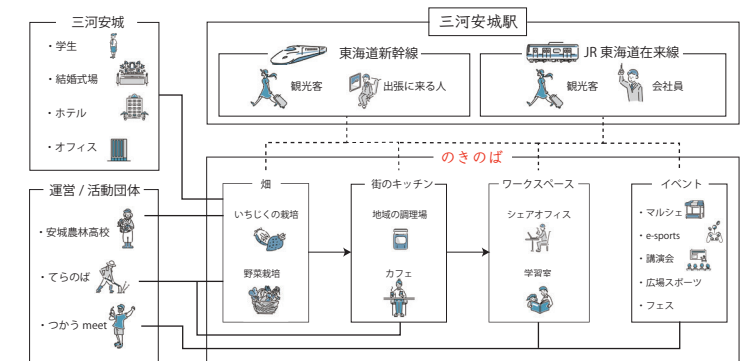
02 三河安城を見える化する

2026年のアリーナ運営に向けて三河安城は多くのコンテクストを当事者意識を持って見える化していかなければいけない。そこで日本のデンマークである安城で生産者と消費者の垣根を超え、新たなまちの関係を構築していくため、公共性の高い広場で開かれた六次産業を提案する。



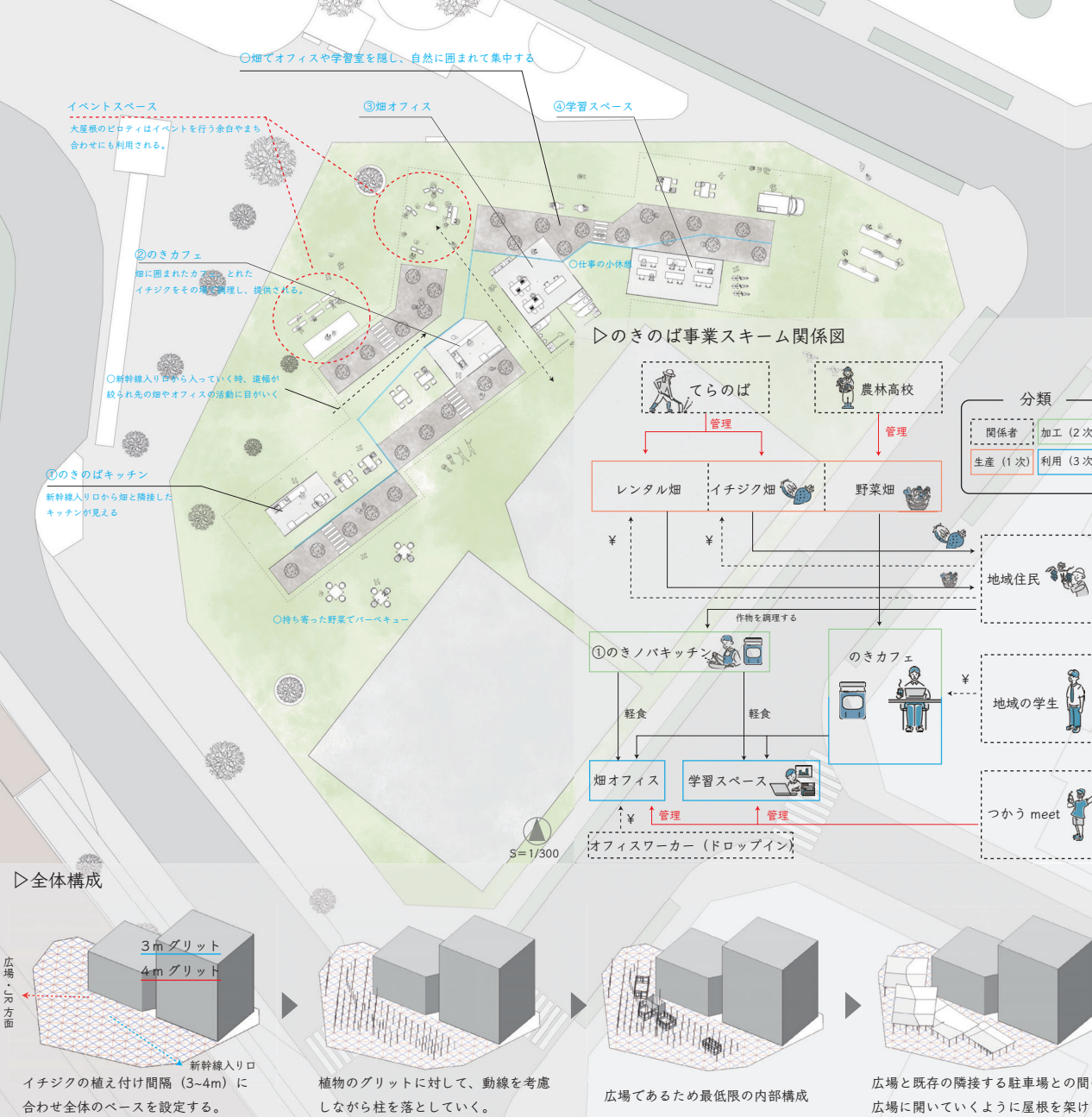
03 共有される畑

県内一番の出荷量を誇る「イチジク栽培」を地域の農業団体を主体に地域を巻き込んでいく。



「のきのば」ではつかう meetの他に安城農林高校、テラノバを主な事業主体とし、畑の管理やキッチン等の管理を定期的に行う。そこでは高校生の農園があったり、地域住民が畑をレンタルして、高層住宅街の中で「みんなの庭」として地域で作物を育てていく。食を通じた地域性を強くする。

04 庭広場



05 資源の循環を促す大屋根

畑やキッチンなど水を必要とする空間で水によって豊かになってきた安城で水と共存し、持続的な活動を促す広場を目指す。

